

国外では誰もが“ニッポン代表”です

前回、日本からの留学生のことを触れましたが、教師もよく言っていました。「日本からの学生は教室でしゃべらない。だから何を考えているのかわからない」。そう、一般論としても日本人は自分の考えや意見を表明することが少ないですね。周りを気にしたり、自分だけ突出することを恐れたり…。よく言えば「謙譲の文化」なんでしょうが、海外ではよくしゃべること、まして語学留学の場合には恥も外聞も捨ててしゃべりまくることが大事だと思います。

他国からのクラスメートの話すのを聞いていると、文法的にもめちやくちゃ。日本の学生の方がはるかに理解度が高い。それでも彼らは平気で自分の考えを発信しているんですよ。これは日本の教育環境そのものからも由来しているでしょう。教科書や先生の教えたことを暗記してよい成績を取る、という日本の方式と、考えや意見を發表させて皆で議論していくというアメリカなどの教育方式と——どちらも長短はありますが、こと「意見の發表」という点では、日本の学生もアメリカ方式の訓練が必要のような気がしました。

授業の2日目。ときばきと進める文法のクラスの雰囲気は前日と同じでしたが、教師ラウラのいでたちには少しばかり目を見張られました。昨日は黒のジャケットにパンタロンでしたが、今日は渋みがあった赤のワンピース。しかもノースリーブで、両肩、腕も丸出しなのです。以来、毎日、衣装を変えてきました。このおしゃれは、教室の雰囲気も変わって私のような年を取った男性にも楽しいものです。



クラス仲間たちと(右端が筆者)

会話のクラスでは、生徒の出身国の国柄や考え方、行動の特色が随所に出てきました。前日、教師のラファエルが4人の生徒に次のような課題を出していました。

- ・どの新聞でもよい。前日の記事の中から面白いと思った記事を要約し發表、そこに出てくる言葉の用法について説明せよ。(担当:トーマス)
- ・移民(合法、不合法を併せて)を受け入れる国のメリット、デメリットについて、賛成派と反対派に分かれて討論をせよ。(担当:アンソニー、アナ)
- ・最もおいしくて簡単に作れる中華料理の材料と作り方について皆に説明せよ。(担当:ファン)

トーマスが新聞から選んだのは、スペインのバスク地方の独立問題。なんとまあ難しいテーマを取り上げたものだが、彼の専攻、リベラルな考え方からすれば、こうした問題に関心を抱くのは当然なのかもしれません。



アンソニーの話では、まずその態度に驚かされました。説明が終わり皆からの質問の時間に入ると、教壇の椅子に座り、長い足を前の机に投げ上げた姿勢で、皆との対話を始めたのです。まさか、これがアメリカの大学の断面でもないでしょうか?!

ファンの中華料理の講習は好評でした。ただ、このスペインでその食材をどうやって手に入れるかが問題じゃないのかな?

ラファエルは“ニッポン代表”の私に、「あの鎖国時代以来、日本は移民の受け入れ嫌いの国ではないのか」と挑発してきました。私が反論の中でスペイン語を磨けるための仕掛けなのかもしれません。私は彼の理解の深さを一応は認めながら日本の現状について説明、自分なりの意見を述べました。クラスでは、誰もが積極的に自分の意見を表明しています。国外に出れば誰でも“ニッポン代表”です。がんばらなくっちゃ!!